

アイヌの日常会話にみられる民俗的修辞

大喜多 紀明[※]

一 はじめに

アイヌ語は、国際連合教育科学文化機関によって消滅危機言語（SCOTT, 1998:97-110）に分類されている。アイヌの文化は、和人（本稿ではいわゆる「日本人」という言葉を使わず、「アイヌ人」と対比する必要性から、慣例に従い、「和人」とした。）の文化とは異なり、使用する言語も異なる。アイヌ文化が豊かな口承文芸（アイヌ無形文化伝承保存会, 1982）をもたらしたことはよく知られている。アイヌの言語についての調査は多くの研究者達（例えば、煎本, 2007:186-202）の手により行われてきた。言語と文化は密着しており分割することができない。一般的に、心意伝承と口頭資料との関連は密接している。

アイヌの口頭資料は、ユカラやウエペケレなどのような口承文芸と、伝承を目的としない自然言語とに大別することができる。日常会話は、言葉の遣り取りを後代に伝達することではないので揮発性が高いのだが、一方では、無意識的な言語や構文を採取しやすい。

アイヌの口承文芸における修辞については、多くの学究的成果（例えば、金田一, 1967）が蓄積されてきたが、アイヌの日常会話についての統語的な視点からの構造分析はそれほどなされていないようだ。本稿で

は、すでに文献化されている、アイヌ口承話者による日常会話資料についての構造分析を行った。特に、本稿では、テキストに表出される交差対句に焦点を絞った。

この論考で扱う主要なテキストは、二名のアイヌ口承話者（鳩沢ワテケ氏と平賀サダモ氏）による日常会話資料である。口承話者である両氏は、日常的には和語（いわゆる日本語）を用いていたが、アイヌ語を「母語」とする多重言語話者であった。また、本稿で紹介する資料は、アイヌ語の日常会話を採取する目的で録音されたものである。

二 アイヌの口承文芸にみられる交差対句

アイヌの口承文芸に、「対句」や「常套句」などの修辞技法が確認されることについては、多くの研究者たち（例えば、PHILIPPI, 1979）が指摘してきた。一方、アイヌの口承に散見される「交差対句」については、筆者による以前の論考（大喜多, 2011:24-32）の中で紹介した。

はじめに、アイヌ口承文芸に確認できる交差対句の一例を記載する。次の引用文は、ウエペケレ「私は石狩に住む女です（和人の夫をもった石狩の女の話）」（田村, 1988:74-81）の一部分である。（下線・記号は筆者による。）

「私は石狩に住む女です」

※アジア民族文化学会会員

A「じきにもう夜が明けて、明るくなるのを待つから」

とみんなは言いました。夜が明けると、私はみんなと一緒に、私の家へ行きました。Bみると私のあとから来たらしく、その家いっぱいにあった行器も粉々にこわされて、鍋も粉々にこわされており、私の寢床はござで作ったものでしたが、そのござもふたつにもみつつにもちぎれて、私の家だったものは、ばらばらに散らかされ、恐ろしい光景になっていることを聞いて、私は、その場で、大声でわあわあ泣いていますと、和人たちがこう言いました、

「Cあなたの家は、そこにあなたが住まなくても、私たちの家のそばに、家を作ってあげるから、仲良く一緒に暮らそう。食べ物も食べさせてあげるから、泣くのをやめなさい」と、Dよいことをふたつもみつつも言ってなだめてくれました。

それから、私が恐ろしい思いをした、シナの木の下を剥いでいた場所に、またみんなに伴われて行きますと、Eあの折れ木にかぶせて、置いていった私の着物がビリビリに裂かれ、あの、私がたいた火も散らかされ、それから、山へ逃げていった跡がありました。

それからFその私の家に、私の父も母もいたからこそ、G先祖の家、G'立派な家の中で、F'私はものごころついたのですが、

「E'こんなふうには先祖の持ち物がこわされてしまったんだわ」

と思って、わあわあ泣いていますと、D'和人方がよいことをふたつもみつつも言

ってなだめてくれました。

「C'和人の村に入っても、あなたがだんなと仲良く幸せに暮らせるように、あなたが食べていけるようにしてあげるから」と私に言いながら、B'和人の家へ私を連れて行って、和人の女が着る着物、和人の女がつける美しい帯も、私につけさせてくれました。きれいな小さい家を和人の家の前に作ってもらって、そこに私は住みました」。

A'「これからは、縄をなわなくても、山歩きをしなくても食べられるようにしてあげるから」

と言われて、すてきな若い和人の夫を与えられ、和人の夫を持って、和人の家の前に住んで、和人との間に子供ができたのですから、美しい和人の子供のような子供がたくさんできましたけれど、私はアイヌの女で、あとから入った、和人の村に、入れてもらったのですから、私の息子たちがでしゃばったり、私の娘たちがでしゃばったりすると、

「お前はアイヌの子だぞ」

と悪口を言われるから、決してでしゃばらないでつつしみ深くおつき合いしなさい。

と立派な奥様が言いました。

付された記号の箇所を配列し、視覚化すると、以下のような構造を見出すことができる。

A 和人の言葉「夜明けまで待ちなさい」

B 家が散らされていた

C 和人の言葉「和人の村で暮らしなさ

い」

D 和人のなぐさめ

E 着物が裂かれる

F 父母がいた家

G 先祖の家

G' 立派な家

F' ものごころついた家

E' 先祖の物がこわされた

D' 和人のなぐさめ

C' 和人の言葉「家族で仲良く暮ら
さい」

B' 新しい家

A' 和人の言葉「山歩きしなくてもいい」

例えばAとA'やBとB'のように、それぞれ対応する箇所が、「対称的」に配置されていることが解る。こうした、例えばA→B→C→D→D'→C'→B'→A'のように表現できる修辞構造は、一般的には「交錯配列法」や「キアスムス」などと呼称される。本稿では便宜的に「交差対句」と表記した。このような緻密な修辞様式は、このウエペケレのみではなく、他のアイヌ口承文芸資料にも確認される場合がある。しかし、こうしたアイヌ口承文芸に確認できる交差対句を紹介した論文は、筆者が知る限りほとんどない。

三 日常会話資料①

さて、それでは、アイヌ口承話者である鳩沢ワテケ氏と平賀サダモ氏による、アイヌ語での日常会話資料（田村，1984a:46-51）を紹介する。この会話資料はアイヌ語での一連の遣り取りの記録であるが、本稿では、和語に翻訳した文面のみを記載することに

する。なお、テキストに付した下線および記号は筆者によるものである。この記録は、田村すず子らが、ワテケ・サダモ両氏に対して日常的な会話を依頼し、その依頼に応じて彼女らが遣り取りを行った会話を採録したものである。ワテケ氏は戦争の時の状況を回想しつつ、当時の苦労した状況をサダモ氏に話しかけ、それに対してサダモ氏は共感しつつ会話がされている。なお、引用文中の記号と下線は筆者による。

ワテケ①

「えー、A私達が小さい時には、Bおじいさんたち、おばあさんたちが、言い伝えとしてユーカラとして語ったのは、C戦争の話でした。Dえー、まさか、人生の途中で、私達が生きている時に、いくさだの、戦争だの、になろうとは、皆も私も思わないでいたのに、Eまあ、日本語で言えば、この、昭和十二年、六月二十二日の日に、F突然、暗くなった。そして何だか変な、黒くしたガラスで上の方を、太陽の方を見た。上の方を見たところ、昼間だとばかり思っているうちに暗くなったのだが、空に、そこらじゅうに星が一面に輝いていた。まあ何と驚いたこと。お日様が出ている時には、星があることもわからなかったのに、暗くなったらこのように、空全体に星が一面に煌々としているのだ。まああきれた、何の前兆で、このように、急に、あたりがすっかり真っ暗になったものか、そしてこのように、夜の星まで見えるのは、心配で気懸かりな気持ちに自分のようなものでも、なって、いたがそれから、F'また、こんなこともあった。

海では、鯨が上がった。ある時は2頭の鯨が上がった。ある時は3頭の鯨が上がった。どうしたことだろうと、私は思いながら私達はいたが、今度は、E' このように、七月の月と日本語で言う、七月の月、八日というならばアイヌ語で言うなら、八日、七月八日から、急なこと、D' 日本の戦争がとうとう、勃発した。今は、私達の国じゅうにいる、アイヌでも和人でも、戦争に頼まれて行けば、始めて、国土を防ぎ守り、国家を防ぎ守ることができるのだなあ、と言っているところをみれば、やはり、国土がだめになる前触れ国家がだめになる前触れが示され神様からお告げがあるために、ある時はさっと暗くなったり、ある時は鯨が次々に上がったりしたのは、神様のお告げがあったのであったことだと、C' 生涯忘れられぬ恐ろしい話として、B' 言い伝えとして、今私が語ろうとしているのですよ妹よ。この話を、まだその続きを言って、A' だんだんに私達二人して話し合うこと、苦労したこと、辛かった忘れられないことを、お話として二人で話すのですよ。さあ後をまたあなたが言ったら今度はまた交代して私が話すから、この苦労話をまだ続けて話しましょうよ。」

サダム①

「ええ、共に、A①アイヌであれ、和人であれ、どの家でもどの国でも、それぞれに、これを言うのが、A②神戦だか、聖戦だか、起こった。A③それがために私たちは本当にびっくりした。どの土地でも、どの部落でも、共に皆びっくりした。

A④その間じゅう、せめて島だけは、何事もなく、作物でも、何でも、私達のために守られていたようであった、何とかしたら、A' ①私達の国、私達の本州の方であれアイヌの国であれ、A' ②敵から守ることができるのではないか、ということばかり、A' ③私達は一心になって、めいめい、お祈りをして神様にお願ひし男はそうしながら、A' ④いた間じゅう、何事もないように、何の食物でも私達の手に入ったのに、どうしたのか、私達の国が負けたと言うことが聞かれたら、それからのように、作物もとれない。年回りが悪いようになり、そのような状態が続いた、私はこのほかにどんなことを言うの？また、あまり私が言い過ぎて、言えなくなるといけない。」

ワテケ②

「Aさて、私達の国が負けた日は、昭和二十年という和人が言う言葉、昭和二十年です。私達の言葉でなら、昭和二十年です。その年、七月の月からのこと、いよいよ、Bこの北海道、アイヌの土地にまで、Cパラパラッという音が鳴り、C' バリバリッという音が鳴り、燃えて行くところがあった。B' 和人の村でも、和人の土地でも、A' 燃やされて、村のあったところ町のあったところが、燃えて行った。焼けばつくいがあちこちに立ち、本当に情けなかった。まあ、土地がいためられ、村がいためられ、泣きながら、私達は苦労して、その年は、この昭和二十年のこと、それから、島のものも、収穫がなかった。米も、生えたけれども、稔りがな

くて、収穫がなかった。飢饉のひどいの
が、二十一年、の時から、飢饉のひどい
のがあって、アイヌでも、和人のお偉力
でも、苦勞したのは、二十一年だったそ
んな苦勞の思い出も話しの間に話してい
るのですよ。」

サダモ②

「本当にねえ。Aそんなことを苦しかった
と思ひ出すことをお互いに話し合うと、B
泣きながら、話し合うことになるねえ。
それから、今年も、どうしたわけかこの
ように、C和人の土地で旦那方の土地であ
れ、D大水なるものが、町村をいためた、
町村をいためたという噂があって気の毒
なことだ。だれでも、Eよい収穫を得たい
からこそ、F旦那方の土地では一層、F´
和人の土地では一層、色々な食物をE´沢
山蒔いたのだったのにこのように、D´水
がはぎとってしまったとの噂、家であれ、
和人方であれ、流れるものは流れ、見つ
からないものは見つからず、見つかるも
のは見つかって、C´だれであっても皆一
緒に和人方であっても、私達の同胞であ
っても、B´泣きながらA´苦勞している
のであろうと思って、そんなことをこそ、
A泣きながら、気の毒に思いもしました。
B遠くの方にばかり聞くものと私達は思っ
ていたのに、どうしたわけか、C私達の国
でも、このように、静内であらうと、
どこでもどこでも、C´私達より東も私達
より西も、はがされはがされて、B´アイ
ヌでも和人でも、水に流されたというこ
とを、それこそA´泣きながら気の毒に思
った。でも私達は、神様のお蔭で、高い

所にいたので、そのような、恐ろしい思
いはしなかったとはいえ、A①遠くにいる
親戚でも、近くにいる親戚でも、川ぞい
にいた者は、本当にいろいろこれからで
も、無かるべきものは大嵐であって、A②
何事もなく、秋まで、A③年いっぱい過ご
せればなあということばかりをA④お互い
に会えば話し合った。私の姉さんのA´①
あなたは遠く離れて暮らしているものだ
から何か話し合うことも、A´②やすやす
とはすることはできなかったけれども、
A´③今日やっと、A´④互いにそばにい
るので話し合ったのです。私も言ったの
ですよ。」

ワテケ③

「本当にねえ。A今年七月の月、四日に
あったこと、この大水は今年だった。私
も川ぞいに自分のような者でも、Bわず
かばかりの田んぼを作ったところ、その
上を水が通って、沢山の泥がその上へ運
ばれた。Cけれども半分程は、それ、実
入がっていて、私の家の者も私も喜んで、
沢山作った人々はそれなりに、少し作っ
た人々はそれなりに、米も稔り、豆も実
が入ろうとしているらしかった。してい
た。

それから、Dあちこち、水のことで気の毒
な話があるそうだね。新冠ででも、実に、
二十六人も私達の同胞も和人もまごって
家もろともに、流されてしまった。E二噂
もE´三噂も、D´そんな話を聞けば、泣
きながら私達は気の毒に思っています。
静内でも、アイヌの家は川ぞいにばかり
あったので、家も畠も流されはがされた

話だ。気の毒だなあという気持をめいめい皆 私 達は持っているけれども、C' 畠の半分でも、人の半分でも、稔りを収穫できそうな話なのかしら？

B' もう田は皆田んぼはよく実が入ってもうじき、A' 今月、十日からだか、十二、三日頃からだか、もう稲を刈るべきようになっていると言われている。どうにかそれ位になっている。それなら、秋の水がなければ稔りのよいのを人の半分だけでもとれそうだということになっている。いろいろ苦勞を思い出すことを、これまで生きてきた間にしていることを、この機会に、私達が話し合っ入れておけば、和人の方々にも聞かせたり、彼等が聞いたりできるようにそういうことを話したのですよ。」

サダモ③

「ええ、そうだと、そうだと。話し合いのいいのをしたねえ。」

ここで、ワテケ・サダモ両氏の言葉を観察してみると、双方とも、交差対句形式を構文中に確認することができる。

まず、ワテケ①についてみてみる。筆者が付した記号と下線部分を辿って行くと、次のような様式が表出する。

交差対句〈ワテケ①〉

A ワテケ・サダモが小さいとき

B おじいさん・おばあさんの言い伝え

C 戦争の話

D 思いもよらず戦争が勃発した

E 日付

F 予兆①（日蝕の話）

F' 予兆②（鯨の話）

E' 日付

D' 戦争が勃発

C' 恐ろしい話

B' ワテケによる新たな言い伝え

A' 現在のワテケとサダモ

ここでの会話文は、F・F' に据えられた二つの「予兆」の話（「日蝕の話」と「鯨の話」）を核として構成されている。文頭では、Aにワテケ氏とサダモ氏が小さい頃の時期の記載があり、一方のA' には、両者が現在会話をしている様子が配置されている。また、B には、戦争の話を、かつて老人の言い伝えとして聞かされたとあるが、B' では、今度は、ワテケ氏が、新たな言い伝えとして戦争の話をしているとある。他のC~EとC' ~E' についても、それぞれ対応関係にあると言える。

次に、サダモ①を見てみる。ここでの会話文は、交差対句というよりは、むしろ、並行法に類する構文構造であるようだ。サダモ①にはAおよびA' を付した。AとA' には下記のような共通項が順次配置されていると解釈できる。

A : ①場所 ②戦争勃発 ③びっくりした
④作物は守られた

A' : ①場所 ②敵から身を守る ③祈り
④作物が取れない

因みに、A③「びっくりした」とA' ③「祈り」は両方ともに、心の状態や作用を表現していると思われる。

また、ワテケ②は次のようになる。

交差対句〈ワテケ②〉

- A 私達の国が負けた日
昭和二十年
B 北海道、アイヌの土地にまで
C パラパラッという音が鳴り
C' バリバリッという音が鳴り
B' 和人の村でも、和人の土地でも
A' 村のあったところが燃やされた
昭和二十年

AとA' については共に、昭和20年についての記事である。また、Bが「北海道」と「アイヌ」を対句として描いているのに対し、B' では、「和人の村」と「和人の土地」を対句としている。そして、BとB' は、互いに「土地」という事柄においては共通している。さらに、Cが「パラパラッ」という擬音であり、C' は「バリバリッ」という擬音である。

アイヌの言葉では対句が汎用されることが知られており、実際、ここでのCとC' の部分のみを見つめてみると、確かに、対句として評価できる。しかし、CとC' の両脇には、A・BとB'・A' が配置されていることを考慮すると、ここでの構文は、対句として比定されるよりは、むしろ、交差対句であると判断するべきであろう。

同様に、サダモ②の言葉にも、次のような配列を発見することができる。

交差対句〈サダモ②-A〉

- A 苦しみ
B 泣くこと

C 和人の土地 旦那方の土地

- D 大水が町村をいためたという噂
E よい収穫を得たい
F 旦那方の土地では一層
F' 和人の土地では一層
E' 沢山蒔いた
D' 水がはぎとってしまったという噂
C' 和人であっても アイヌであっても
B' 泣きながら
A' 苦労している

ここでは、Fの「旦那方の土地では一層」とF'の「和人の土地では一層」を核とした交差対句であると言える。Eの「よい収穫を得たい」ことが理由となってE'「沢山蒔いた」という行為がなされている。そして、DとD'は、洪水があって家々や村が壊されたことが描かれている。また、Cは「和人の土地」と「旦那方の土地」を対句にしており、一方のC'では「和人」と「アイヌ」を対句にしている。さらに、B・B'は、双方とも「泣く」という言葉があり、A・A'には「苦」もしくは「苦労」という共通する言葉がある。

さらにサダモ氏の言葉には、今一つの交差対句を見出すことができる。

交差対句〈サダモ②-B〉

- A 泣きながら気の毒に思った
B 北海道でも 静内でも
C どこでもどこでも
D 私達より東も
D' 私達より西も
C' はがされはがされて
B' アイヌでも 和人でも

A' 泣きながら気の毒に思った

ここでのAとA'は「泣きながら気の毒に思った」という、全く同じ言葉である。また、Bが「北海道」と「静内」の対句であるのに対し、B'は「アイヌ」と「和人」の対句である。さらに、Cでは「どこでも」を二回繰り返しており、C'では「はがされ」が二回繰り返される。そして、DとD'は、「東」と「西」という正反対の事柄を似たような語句で対応させていることが解る。

また、サダモ②の後半以降には、サダモ①の時のような並行法に類する構造がある。

A : ①遠く近くの親戚 ②何事もない
③年いっぱい ④話し合った
A' : ①遠くにいるワテケ ②やすやすと
③今日やっと ④話し合った

因みに、ここでのA③とA'③は、両方ともに、時間もしくは期限を指しているだろう。さらに、ワテケ③についてである。

交差対句〈ワテケ③〉

A 今年の七月四日
B 田んぼを作った
C 半分実が入る
D 水で流された話
E 二噯
E' 三噯
D' 水で流された話
C' 半分の収穫
B' 田んぼの話
A' 今月の十日か十二・三日

この会話文も、E・E'に配置された「二噯・三噯」という対句を核とし、その両脇にそれぞれ対称的に語句が配列した、5対の対応をもつ交差対句であると言える。

四 若干の考察

ワテケ・サダモ両氏の会話には多くの交差対句形式を見出すことができたのであるが、考慮しなければならない点がある。まず、田村らは、録音することを事前に両者に伝えた上で、両者に会話を促している点である。それに付随し、会話が、話者ら自身の「回想」を主な話題としてなされていることも考慮すべき点であろう。そして、話者が、口承文芸の伝承者であるという点も忘れてはならない。録音されることを意識に入れて会話が交わされると、どうしても日常的な遣り取りではなく、畏まった会話になりやすい。しかも、ここでの会話のテーマが、戦争時の回想であり、かつ、話者が両者ともにアイヌ口承話者であるので、彼女らは、心ならずも「ウエベケレ（昔話）」のように、即興で語ってしまった可能性も加味しなければなるまい。実際に、「ワテケ①」は、一つの日常会話文としては長文であるだろう。また、中央に二種類の譬話を対比させつつ構文全体を構成する様子は、ウエベケレやユカラに見られる典型的なパターンの一つであると考えられる。言い換えれば、「ワテケ①」自体が、既に、即興的に語られた小規模なウエベケレになっていると解釈することも可能である。

したがって、「回想」ではなく、より「生活的」なテーマであり、かつ、「長文」ではなく、より「短め」の会話文も併せて調査

する必要があると言える。次項では、ワテケ・サダモ両氏の会話文の中でも比較的短い言葉の遣り取りであり、かつ、日常的なテーマの会話資料の一部を掲載した。

五 日常会話資料②

次の資料も、ワテケ・サダモ両氏による一連の会話の記録資料（田村，1984b: 12-17）の一部である。

サダモ④

「ええ。いいよ。A そう思いながら、来たのだから、B 何かきかれたら、私がわかることは、何の事でも、B' 私がきかれたことは、みんな言って、お嬢さんに聞かせようとA' 思いながら来たのだよ。]」

ワテケ④

「へへ…。さああなた何か言いなさい。むずかしい事でなくやさしいの。」

サダモ⑤

「では、今から、A 何をきかれようとして いるのであっても、B 私がきかれたことは、C 昔の事でも、今の事でも、C' 先祖の事ならばそのように、今の私たちのやり方ならばそのように、和人のやり方ならばそのように、B' 私がきかれたことは、A' みんな言って聞かせ、私がわかる限りは教えてあげようと思うよ。]」

ワテケ⑤

「それならいいよ。そのようにしてくださいね！」

サダモ⑥

「ええ。それから今日、今から、A あなたは行って本当に、病人を（あなたは手、手…）マッサージなりともして、B 病人がその病気がよくなって、そのこと、あなたが厚遇され、C 「このように生かしてくれてありがとうよ。」と、C' 本当によく感謝されるように、一所懸命になって、B' 病人を、よく治すようにと、神様にも守護を祈って、A' いい具合にマッサージなりとも、しようと思いなさい！]」

この一連の会話では、「ワテケ④」や「ワテケ⑤」のような極端に短い会話文には、交差対句を見出すことができないようだが、それ以外の箇所には、交差対句を確認することができる。

「サダモ④」を観察してみると、次のような配列がある。

交差対句〈サダモ④〉

- A そう思いながら、来たのだから
B 何かきかれたら、私がわかることは、何の事でも
B' 私がきかれたことは、みんな言って、お嬢さんに聞かせよう
A' 思いながら来たのだよ

AとA'では、「思いながら来た」という、ほぼ一致した言葉である。また、BとB'では、共に、聞かれたことに対して全てなんでも答えるという内容である。
さらに、「サダモ⑤」では、次の通りである。

交差対句〈サダモ⑤〉

- A 何をきかれようとしているのであっても
B 私がきかれたことは
C 昔の事でも、今の事でも
C' 先祖の事ならばそのように、今の私たちのやり方ならばそのように、和人のやり方ならばそのように
B' 私がきかれたことは
A' みんな言って聞かせ、私がわかる限りは教えてあげようと思うよ。

ここで、Aの構文を、A'に接続させると、「今、何を聞かれても、わかる限り教えてあげる」という意味が成立する。したがって、その間に配置されたB・B'およびC・C'については、A→A'の構文に対しての補足事項であると考えることができる。なお、BとB'は、同じ言葉であり、Cの「昔の事」と「今の事」は、それぞれ、C'での「先祖の事」と「今のやりかた」に対応しているであろう。

そして、「サダモ⑥」では次のようになる。

交差対句〈サダモ⑥〉

- A あなたは行って本当に、病人を（あなたは手、手…）マッサージなりともして
B 病人がその病気がよくなって
C 「このように生かしてくれてありがとうよ。」
C' 本当によく感謝されるように、
B' 病人を、よく治すようにと、神様にも守護を祈って
A' いい具合にマッサージなりとも
A・A' は、共に、「マッサージ」について

の記述である。また、BとB'については、「病人」を治癒することについての話であり、CとC'は、「感謝」についての話となっている。

ここでの会話記録は、長文ではなく、言い伝えのような性質を持つ会話でもないだろう。したがって、即興的なウエベケレのような趣はほとんどない。それにも拘らず、これらの文献には、交差対句が見出される。また、「サダモ⑤」のBには「昔の事でも」と「今の事でも」が、対句として述べられている点は、口承文芸にもしばしば確認できる修辞技法であろう。

六 黒川セツ氏による会話資料

ここで、参考のために、黒川セツ氏から採録された資料（貝澤，2003:147-157）の一部を紹介する。セツ氏はアイヌ民族であり、アイヌ語の話者なのであるが、ここではアイヌ語ではなく「和語」で会話をしている遣り取りが記録されている。会話の主旨は、アイヌにおける伝承の紹介である。（テキストに付した下線・記号は筆者による）

（それで、その元にその木を返しに行ったの。）

「Aうん。Bそここの場所にね置いてきたの。C持ってって置いてこいって言われてね。火に…ここさ燃やしたら、D焚き火だから昔はね。で、D'だけど、焚くことできないんだと。神様のものだから、そんな無駄にはできないんだから、C'持ってって置いて来いって言うから B'置いてきた。A'うん。」

（あの、フチは住んでいたって言ったん

でしょ？神様が住んでいたところだったの？)

「うん、そそそ。」

(したら、ばあちゃんのときは、もう神様は住んでいなかったのかな？)

「Aワシらのときもまだいたっ…そりゃあカムイだから、自分の屋敷だからそこにいたかも知らんけど、B我々人間には、C神様住んでたとこだ、って聞かされたって、Dどんな処にいたか D' どういう風なあれだかも知らんないけど、やっぱりそこで、C' アペクンチって、神様が住んでいたんだっていうことはね、B' ウチのフチも言って聞いたけど、西島のばあさんも言って聞いたの。A' それじゃあハツキリこの、アペクンチ、ペクンチの意味てね、「いやあすごいもんだな。神様同士もやっぱり仲悪いばこんなことあるのかなあ。」と思って聞いていたから。」

この会話文の中に見出される二点の交差対句を、次に示す。それぞれ対応していると思われる箇所には下線を施した。

交差対句〈セツ①〉

- A うん
B その場所にね置いてきたの
C 持ってって置いてこいって言われてね
D 焚き火だから昔はね
D' だけど、焚くことできないんだと
C' 持ってって置いて来いっていうから
B' 置いてきた
A' うん

交差対句〈セツ②〉

- A ワシらのときもまだいたっ…そりゃあカムイだから、自分の屋敷だからそこにいたかも知らんけど
B 我々人間
C 神様住んでたとこだ、って聞かされたって
D どんな処にいたか
D' どういう風なあれだかも知らんないけど
C' アペクンチって、神様が住んでいたんだっていうことはね
B' ウチのフチも言って聞いたけど、西島のばあさんも言って聞いたの
A' それじゃあハツキリこの、アペクンチ、ペクンチの意味てね、「いやあすごいもんだな。神様同士もやっぱり仲悪いばこんなことあるのかなあ。」と思って聞いていたから

ここでは、それぞれの対応についての細密な解説は行わないが、セツ氏の会話にも、交差対句が見出されていることが確認できる。

さて、この資料は、アイヌ語の会話を記録するという目的ではなく、あくまでも、セツ氏が伝え聞いた伝承を確認するための実地調査に、セツ氏が同行した時の会話である。この場合、アイヌ語で会話がなされたのではなく、アイヌ語の単語や文法の採取を目的とした会話ではないので、セツ氏には、アイヌの文法や構文等についての、話者としての「気遣い」があるとは考え難い。むしろ、セツ氏にとっての、比較的自然な会話であると考えるべきである。

七 おわりに

アイヌ口承話者による日常会話の修辞を分析したところ、ウエペケレやユカラに散見される交差対句は、本稿で取り上げた三人の話者の会話文にも見出すことができた。表出する交差対句が、他のアイヌ話者の日常会話にも共通して確認できるかどうかについては、今後さらに調査し、別の機会に報告するつもりである。

話者が意図的に交差対句を主たる修辞技法として採用しているのか否かは確認できていないのであるが、おそらくは無意識の中で構文中に構築される交差対句は、いずれにせよ、修辞的に美しく精緻である。こうした対称表現が生じる一因が、アイヌ民族の民俗の心意によるのではないかと筆者は仮定している。

また、仮に、他の多くの会話資料にまでも、交差対句が頻用され、それがアイヌの習俗との関連があるとするならば、我々がアイヌ語の会話を習得する際には、習俗的な影響も加味して学習・研究せねばなるまい。今後、多くのアイヌの口頭資料について、さらに調査を進め、交差対句の表出頻度や、対応パターン等に対する理解をより深めていかなければならないと考えている。

引用文献

アイヌ無形文化伝承保存会 編集, 1982, 『英雄の物語』, アイヌ無形文化伝承保存会
煎本 孝、山岸 俊男編, 2007, 「アイヌ語研究の課題と展望」, 『現代文化人類学の課題』 p186-202, 世界思想社

貝澤 太一, 2003, 「〈調査報告〉黒川セツさんの伝承 1 : アペクンチとペクンチの伝承」, 『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』, 第 9 号, p147-157, 北海道立アイヌ民族文化研究センター

金田一 京助, 1967, 『アイヌ叙事詩・ユカラの研究』, 東洋文庫

大喜多 紀明, 2011, 「『アイヌ神謡』の修辞パターンから心意を辿る — 『交差対句』を糸口として —」, 『西郊民俗』, 217号, p24-32, 西郊民俗談話会

PHILIPPI DONALD L, 1979, 『Songs of Gods, Songs of Humans: The Epic Tradition of the Ainu』, University of Tokyo Press.

SCOTT SAFT, 1998, 「Endangering their Languages, Impoverishing our World : Using the Case of the Ainu Language to Argue for the Need to Preserve Endangered Languages」, 『北海道東海大学紀要』, 人文社会科学系 11, p97-110, 北海道東海大学

田村 すず子, 1984a 「ワテケさんとサダモさん：沙流方言 会話・単語：会話II 戦争の話, 苦労話を言い伝えとして語る」, 『アイヌ語音声資料』, 1, p46-51, 早稲田大学語学教育研究所

田村 すず子, 1984b 「ワテケさんとサダモさん：沙流方言 会話・単語：会話I (1) 話」, 『アイヌ語音声資料』, 1, p12-17, 早稲田大学語学教育研究所

田村 すず子, 1988 「二風谷の昔話と歌謡・神謡：民話5」, 『アイヌ音声資料』, 5, p74-81, 早稲田大学語学教育研究所